
夏の渚

赤影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の渚

【NNコード】

N8455B

【作者名】

赤影

【あらすじ】

能登半島に住む新太郎は、高一の夏休み渚で埼玉から来た武井由美と出会う、武井由美は友達の越野恵子と夏休みを利用して受験勉強の目的で、新太郎の家の近くの万福寺に来ていた。新太郎は由美と恋に落ちてしまう。しかし、夜、由美を連れ出したことで、万福寺の住職から会うことを禁じられてしまう。盆踊りの夜久しぶりに由美と会うことの出来た新太郎は、心の思いを由美に打ち明ける。

低い音のお経が聞こえてきた。

「もう、3時か！」僕は、ゆっくり起き上がった。

ここは万福寺の日本庭園の縁側である。

お寺の中では城と言われていて、一本の杉の木でこの離れは作られている。

夏でも庭園を撫ぜた、心地良い風が入り込んでくるこの場所で、昼寝をするのが日課だ。

「新太郎！ 夏休み寝てばかりいいで勉強しろよー。高校2年生は直に終わるぞ！」万福寺の住職が遠くから叫んだ。

「ハイー」「ぶー行くぞ」一緒に昼寝をしていた犬のラブラドルと一緒に砂浜田指して僕は駆けだした。

コバルトの空と、Hメラルドの海、白い砂浜、緑の松林、大好きなこの場所は、能登半島の中間くらいにある、4kmくらい続く増穂ヶ浦の渚だ。

遠くから、白い日傘に白いワンピースの女人人が、渚を歩いてくる。太陽の光でよく見えなかつたが、近づくにつれてスカートから出ている細い足が、以上に白く見えた。

「ぶーダメだよ」リードに繋いでなかつたぶーが女人に向かつて全力で走つていつた。

「すみません！」「いいえ！名前は？」「ぶーと言います。」

「面白い名前ね、貴方は！」とやさしく笑いながらぶーの頭を撫ぜた。

うなじの白さが、眩しかつた。

「ぶー君、とようなら、又ね！」軽くお辞儀をして、何かを口はずさんで歩いて行つてしまつた。

僕とふーはボーと、都会的なその女の人の後姿を見ていた。

「ふー綺麗な人だなー・・・・・・・・

これが彼女と僕の出会いだつた。

何時ものように寺の縁側で昼寝をしていると「ふー君ー」。

薄日を開けると、一人の女の人が立つていた。

「ゴメンね！起こしてしまつた。」

僕は声にならない声で「どうして！？」

始めて会つたもう一人の太り気味の女の人が「由美、知つているの？」

「昨日散歩していくて会つたの！」

「ふん！」と言つて太り気味の人は喋りだした。

「私達、昨日からここでお世話になつてゐるの、私は恵子、越野恵子、彼女は武井由美、私達早稲田を受験するために、ここで受験勉強しようと思つて、・・・」の田舎に埼玉の大宮から來たの、貴方名前は？

由美はニコニコ笑つてゐた。

「僕は、松下新太郎です。よろしく」

「由美、勉強しよう！」とその場から一人は立ち去つていった。

「起こすなよ！」と思ひながら、立ち去つて行く由美の白い足を見ていた。

僕の生まれ育つた漁村は坂が多い、海から直に山になる感じで、山のふもとに申し訳なさそうに300軒くらいの集落がある。だから、村のどこからでも海が大きく見える。

地下の間と呼ばれる、漁船が20隻程止められる港がある。夜になると港の小さな灯台が、村の中を刑務所のパトロールのライ

トのように照らすのだ。

僕の家から、200mくらい坂を下りて、防波堤の上を50m行くと灯台に着く。

僕はあまり弾けないホールギターを持って、灯台に向かった。時間はもう6時になろうとしている。

防波堤の両サイドの夜光虫が凄く綺麗だ。

灯台の階段に腰を卸して、しばらく向こう岸の巖門がんもんの明かりを見ながら、由美事を考えていた。

何故か自分でも解からないが、あの日からお寺には毎晩に行っている。しかし由美のことが頭から離れない。

「又会ったね！」

気がつくと由美が後ろに立っていた。

驚いた顔の僕の横に座った。近すぎて僕の心臓の音が聞こえてしまうのではと心配だった。

「ギター弾くんだ！　聞かせて…」「ダメー今練習中で…弾けないんだ」

「そう！好きな歌ある？」「……………」真っ白になつて何も出てこなかつた。

「……………」「……………」

「アツ」「ソツ」長い沈黙の後、何か話さなければと思つたら同時に話してしまつた。

「そちらからどうぞ」「由美ちゃんからどうぞ、あつ」由美ちゃんと言つて慌てて僕は手で口を押さえた。

そのしぐさが可笑しかつたのか、由美はケラケラ笑つた。

時々灯台の光が由美の顔が浮かぶと、長いまつ毛と円らかな瞳を田に入つてくる。

それからは、生れた街のこと、学校のこと、友達のこと、勉強の

こと、趣味のこと、好きな色、天皇陛下の存在についての事、取り留めなく話した。

「由美ちゃん、空が明るくなってきたよー!」「本當だ!朝日を新ちゃんと一緒に見よう!」「

自然に由美ちゃんと新ちゃんと呼び合っていた。

「わあー綺麗!」由美の目には薄つすら涙が光っていた。
そして僕らは自然と手を繋いでいた。

又明日も会う約束をして、僕は村の人にはわなにように遠回りして帰つた。

ベットに入つたが、全然眠る事ができなかつた。
自然と頬がゆるんでくるのだった。

「新太郎!」

呼び止められたのは、金林幸一だ。

彼は同級生で外国航路の船員だ。船員は8ヶ月船に乗ると4ヶ月休む、幸一も毎日暇を持て余している。

「お寺に、都会の若い子着ているらしくぞー、幸太郎引っ掛けにい
かんけー」

幸一は遊びなれでいる、色々停泊する港で女遊びをしたことを聞いている。

「僕はいいよ! チョット行くところがあるから」「そうかー」
幸一と別れてから、由美の事が少し心配になつた。

由美はもう来ていた。「新ちゃん!」声を殺して小さく手を振つて
る。
なんて可愛いんだと思った。

「今日幸一つてのが来なかつた？」

「着たよ！今も一人でどこか行つてしまつたの、バイクで！」

「誘われなかつたの？」

「誘われたけど、由美は新ちゃんかいの！」　一昨日帰ったけど、眠れなかつた、嬉しくて！」

• • • • • • • •

「信じてないの！ 本當だから、本當だから！」

「僕も眠れなかつた、何故こんなに急に好きになつたのだろう！自分が不思議なくらい！」

ハレシイ

由美は僕の腕にすがりついた。由美の髪から凄くいい臭しかした。

「新太郎いるか！」

幸一はすげすげと、僕の部屋に上がってきた。

「ハハハハ！」

「何を？」

「Hに決まつてゐるでしょー」

「誰？」

「お寺に来てる、都會の女の子さ！綺麗な子に声かけたけどダメだつたので、バスの方で我慢したけどなー、今度は綺麗な方ともやりたいなー」

「僕は、あの子が好きなんだ！」あの子に何かしたら僕が許さない

ぞ！」

「そうか！相手はそのこと知ってるのー。」

「うん！」

「新太郎も手が早いじゃ！」

「そんなんじやないよ」

「わかつたあの子にはなにもしない！新太郎、今夜バイクもう一台借りてくるから、あの都會の子誘つて走らうぜ」

「いいけど！僕免許ないぜ！」

「関係ないね！そんなこと、こんな田舎に警察張つているわけが無いよ、じゃなー！」

幸一は一人で時間も決めて、部屋から出で行つた。

僕は免許を取つたが、免許書が来る前に事故を起こし、その免許は無効になつてしまい、親からはバイクに乗ることは禁止されていた。

由美と灯台で待ち合わせしていた1時間前に幸一が来た。

「新太郎行くぞ！」

「・・・・・」

「後ろに乗りなー」

二人乗りでしばらく走ると、原付の小さなバイクがあつた。

「これで一人乗るの？」

「どうせ無免許なんだから、二人乗りも関係ないだろー！」

「それもそうだけど」

万福寺の裏には、200個ほどの墓がある。その間を幸一は100円ライターを力ち力ちいさせて、その灯りで墓の中に進んでいった。窓ガラスをコンコンと叩き、「恵子！幸一だけど・・・恵子」と低い声で言つた。

「きやー」由美の声だ。

「僕だよ！新太郎・・新太郎だよ」

「火の玉と思って、顔を覆つたら今度は低い声がしたので、もうびっくり！脅かさないで！もう」

「恵子ちゃんは？」

「トイレにいつているの」

奥からドタドタ音がして、駆けてきた。

男の足を音だ。

「住職だ！シー」

「どうしたんだ？びっくりしたような声が聞こえたんだけど」

「すみません鼠がいたので！」

「そうか！明日薬でもまくか！勉強しつかりしなさいね！ では・・・

・おやすみ

「おやすみなさい！」

「由美どうしたの？あらー幸一」恵子がトイレから帰ってきた。

「シ一 恵子ドライブに行こうー由美ちゃんも、バイク2台あるんだ」と幸一が言ひと二人は、ニコッと笑つて顔を見合わせて頷いた。

一人は素足だったので、幸一は恵子を由美は僕がおぶつて、恵子がライターを点けたり、消したりして墓の中をバイクの止めてあるところまで向かつた。

誰となくクスクスと笑うと、何故か4人とも可笑しくなつて皆で大笑いした。

僕達の村から、10kmほど走ると松本清張の「0の焦点」の舞台となつた、「関の鼻」という観光地がある。

昼は観光客も多いが夜になると誰もいない所だ。

僕達は「関の鼻」に向かつてバイクを走らせた。

原付バイクは小さく身体を密着しないと乗れない、由美の胸が僕の

薄いTシャツを通して脚下に感じる。

真夏だが夜中の風は、肌に少し冷たく感じた。由美も寒いのか僕の背に胸をよりいっそう押し付けてくる。

女の子とこれだけ接近した事の無い僕は、夢の中のような気持ちだ。「このまま何所までも走つてみたい」と心中で思った。

関の鼻に着いた僕達は、流木を集めて、海岸で焚き火をした。二人ずつ向かい同士で、岩場に腰を下ろして座つた。

しばらくすると、幸一と恵子は長いキスをしている。

僕は由美の顔を見た。

すがりつくような由美の瞳だ。

「幸一僕ら先に帰るよ!」返事も返つてこなかつたが、由美の手を引いてバイクに乗つた。

なんとなく気まずくその夜は分かれてしまった。

次の日、いつもの灯台であつた時、幸一の話になつた。

僕と幸一は幼稚園から同じで、幸一の母親は早く亡くなつたこと、今は父親と兄と3人で暮らしていること、漁村なのに僕が刺身を食べなかつたのに、幸一が鯛を釣つてきて自分で刺身にして食べさせてくれてから、食べれるようになつたこと、愛の無い殺伐とした今までの人生で、人を愛せなくなつていてのことなど、由美に話した。

由美は「幸一さん、可哀想!」とボッソと呟くように言った。

「恵子ちゃんには何を言つても無駄かもしれないね」
由美は長い時間話さなかつた。

そして「恵子は本気だと思う、誰ともそんなに簡単に付き合つ子でないもの」

その夜もなんとなく暗い気持ちで分かれた。

「昼」はんを食べていると電話がなつた。

「新太郎チヨットお寺にこないか！」住職だ。「ハイ！ 行きます。

「住職」というと白いひげをはやしたおじいさんをイメージするとと思うが、万福寺の住職は31歳、京都の大谷大学を卒業して跡取りのいないこの寺に養子になつたのは、僕の5年生の時だ。宗教信に燃え、お寺に近い子供達を集めて日曜日に勉強を教えた。僕の中3までその日曜会は続いた。僕達の恩師だ。

お寺に行くと幸一が座禅をされていた。

「新太郎もここに座れ！」住職は強い口調で言つた。

「お前達は、越野恵子さんと武井由美さんを夜連れ出していくというのは・・・本当か！」

「彼女達はここにバカנסに着たのではないことは知つてゐるだろう！」

「はい！」

「新太郎も、幸一もこの夏は、お寺には出入り禁止だ。」

「はい！」

「彼女達も夜は外出禁止にした。お前達は1時間座禅だ。」

「はい！」

これから1週間、灯台に行くが由美は来なかつた。

夏休みも半分が過ぎてしまった。

お盆は、学校の広場で夜遅くまで盆踊りがある。

友達に誘われたが、広場には行かずにバーを連れて灯台に行つた。

ボーと海を見ていると、ぶーが急に立つて走つて行つた。

「ふー何所に行くんだ！」

しばらくすると向こうからふーと曲美が駆けてくる。

傳書五事に曰か、一傳書に才

「盆踊りを見に行く許可をもらつたの、新ちゃんにこないかと思つ

たよ!

「来れないと思つたけど毎日ここに来ていた！」

卷之六

そして自然に軽く唇に唇を重ねた。

8月25日の夏祭りに会つ約束をして、由美と別れた。

10日間会えないけど、由美の勉強の邪魔にならないよう我慢することにした。

僕は10日間土木のバイトに行くことにした。

能登のキリコ祭りは、各地で夏から秋にかけて行われるが、僕達の漁村ではキリコの人足をするには、伝統の衣装を着なければならぬい。

男は、上は白のワイシャツに黒のベスト、下は白のトレパンにゲートル、ワラジだ。

女は、浴衣に襷掛け、小さなエプロンをして、浴衣を膝までまくり

上げお腰を見せる、お腰の色は、未婚は赤、既婚はピンク、子供のいる人はブルーなのだ。

昼頃、由美は僕の家を訪ねて来た。

母に由美を紹介してから、「由美、元気だつた。」「新ちゃんも元気!」と家族がいたので短い挨拶をした。

由美にどのようなお祭りか説明すると「由美も参加したーい！」

「由美は、無理だと思ひけどなー」

結構舌暴なんだけよ 怪我したら困るじゃ！」

「らそりは、音代、ノノ、ベ、うつ、一、以、最後」

卷之三

• • • • • • •

「毎年、喧嘩も多いし、怪我人もでるんだよ！」

由美は、口をしながら、何も言わず、楽しそうに頷いていた。

その瞳に負けてしまつた。

「ジャー 最後は参加しないと約束だよ！」

「わあー ありがとう新ちゃん！」

「お袋！由美ちゃんに祭りの衣装ある？」

浴衣姿の由美を見た時、なんと可愛いのだからと思つた。

勿論、お腰色は赤だ。

由美は、子供のようにはしゃいでいた。

お客様にお料理を運んだり、お酒を注ぎに回つたりして、もう人気者だ。

辺りが薄暗くなってきた時、「御立ちだぞー」の声でお祭りは始まつた。

ドンドコ、カンカン、ドンドコ、カンカンと太鼓と鐘が鳴り響いた。僕達高校生の男が人足するキリコと、女の子のキリコは違っている。「この子初めてなので、お願ひします。」と周りの子にお願いをして、僕は自分のキリコに戻った。

村を練り歩きながら何度も休憩する。

その近くの家々では縁側を開放し、知らない人でも料理を振舞う。休憩の度に僕は由美のキリコに行つた。

「由美！大丈夫」

「大丈夫よ！凄く楽しい！」

「あの家ビール飲もうー」

「ビール飲むの？」

「今日は何でも有さー！」

「オバちゃん！ビールちょうどだいー」「そこに冷やしてあるから、自分で持つて行つてー！」

「由美言つたでしょー！何でも有だつて」

由美は僕の目を見て、ケラケラ笑つた。

キリコ行列が海岸線に出た時、一人で抜け出して何時も会つた灯台に行つた。

キリコの灯りが、緩やかに動く海面に写る。ズート僕の手を由美は握り締めている。

「綺麗ね！」

「そうだね」

「今日のこと、一生忘れない」

長い沈黙の後、僕達は長いキスして、僕は由美を抱きしめた。
長く短い時間が過ぎていった。

「新ちゃん……私達明日帰るのー」

「…………」

停留所の脇で、瞳に一杯の涙の溜まつた由美の顔を見つめている。
「もう、泣かないで手紙書くからね！」

「うん…………」

由美は弱く頷いた。

「受験がんばってね！」

「新ちゃん！ありがとう…………」

それから何も言えずに佇んでいると、赤のラインの入った北陸鉄道
のバスが来た。

由美はバスに乗る時も、僕から田を離さなかった。

「由美ちゃん！さよなら！」

僕は周りの人も気にせず叫んだ。

由美は一番後ろの席に行き、窓をから小さく手を振った。

思わず僕は動き出したバスを追っかけた。

バスは見る見るうちに離れて行く、立ち止まり大きく手を振った。

「由美ちゃんーー！」

バスの中の由美の顔が段々小さくなっていく！

バスが見えなくなつてから、海岸に向かつて走つた。

向こう岸に、由美の乗つたバスがゆっくり走つて行くのが見えた。

「わよーわよー」と繰り返し心の中で叫んだ。

これが高一の夏休みの出来事だった。

新ちゃん元気！

色々お世話になりました。ありがとうございます。感謝しています。

学校で恵子と会つと、能登の話題ばかりです。

由美の部屋には、お祭りの時撮つた新ちゃんとの写真を飾つてあります。

朝起きると「おはよー」「寝る時は「お休み」と新ちゃんの顔を毎日見ています。

ベットに入つて目瞑ると、あの青い海、白い砂浜、灯台から見た神秘的な夜光虫の光、

そして、新ちゃんの笑つた顔が浮かんでくるのです。

何時も幸せな気分で眠りに就く事ができます。

能登では勉強はあまり出来なかつたけど、毎日4時間くらいの睡眠で今は頑張つています。

新ちゃんの高校生活はどうですか！

来年、大学生になつたら又能登に行く」とを目標に机に向かつています。

がんばります！では

大好きな新ちゃんへ

由美より

由美ちゃん！僕は元気です。

でも、由美ちゃんの事が頭から離れず、昨日も先生に質問されたのに気がつかなくて「新！何ニタニタしているんだ！」と叱られました。

その時は、由美ちゃんの柔らかい唇が頭に浮かんでいたのです。

由美の黒い髪が大好きです。

由美の大きな瞳が大好きです。

由美の柔らかい唇が大好きです。

由美の白いうなじが大好きです。

由美の少し小さい胸が大好きです。

由美の細い指が大好きです。

由美の少し大きいお尻が大好きです。

由美の長い足大好きです。

由美の笑顔が大好きです。

由美の全てが大好きです。

夏休みが終わつたばかりだけど、早く夏休みが来て欲しいです。

可愛い由美へ

新太郎

僕達は1週間に一度こうやって手紙を交わした。

暗い海の向こうに、漁船の灯りが見える。

波の音と松林の風の音、そして砂を踏む自分の足音。

手に由美からの手紙を握り締めて夜の渚をトボトボ歩いている。

クリスマスイブに届いた由美からの手紙、

最後の文書

楽しい夏の日の思い出をありがとうー。

新ちゃんへ

由美より

受験勉強に疲れきった由美の精神状態は、恋愛どころではなくつたようだ。

立ち止まり手紙の束を砂の上に、そしてライターで火をつけた。
炎の色が以上に綺麗だつた。

由美ありがとう！ 幸せになつて！

新太郎の夏の恋はここして終わつた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8455b/>

夏の渚

2010年10月10日03時31分発行